Letter for Members No. 12 2003

Japan Prosthodontic Society

日本補綴歯科学会
Japan Prosthodontic Society
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpds/
発行人　大山　喬史　　編集　広報委員会
事務局　〒170-0003　東京都豊島区駒込1-43-9　（財）口腔保健協会
Tel 03-3947-8891　　Fax 03-3947-8341

平成15年12月10日発行

日本補綴歯科学会の法人化に向けて

大山喬史30代会長より平成15・16年度執行部の重点課題の1つとして「本学会の法人化取得/実現に向けての準備」が提示され，新たに法人化担当委員会が設立された．法人化に対する検討は，会務連絡会と法人化担当委員長との合議で骨子を提示し，法人化担当委員会が具体案の策定を付託する方針が示された．

これまでも本学会の法人化に対する取り組みは行われ，田中久敏28代会長の時代に「法人化へ向けてのワーキンググループ」が発足し，平成12年12月の会議のまとめとして「今後の展開として，新会長は法人化に向けての議論を進めていくか否かの方向性を明確に示す必要がある」ことを提示した．

川添堯彬29代会長はこれを受けて，重点活動方針の1つとして「法人化スタートの準備，検討」を掲げた．そして具体的な活動としては「前執行部の調査・検討結果を踏まえ，まず法人化の必要性を『メリットとデメリット』の観点から調査・検討すること」が必要であるとした．平成14年10月に川添堯彬29代会長と平井敏博法人申請準備世話人の連名で理事・評議員に対し「法人格の申請について」の報告が出され，本学会が法人格を取得することに対する承認と引き続き社団法人申請の準備調査を行い，NPO法人，社団法人のどちらかの法人を選択するかに関しては，改めて後日の協議事項とすることで承認された．

本年度の本委員会の活動としては，平成15年6月の委員長会開催時に文部科学省から講師2名を招聘し，勉強会を開催した．公益法人としてのメリット，デメリット，平成18年以降に実施が予想される「公益法人制度の抜本的改革に関する基本方針」などについての解説が行われた．これらを踏まえ本学会は，平成15年9月に法人化担当委員会を開催し，**社団法人を目指す**ことが，平成15年10月24日に開催された第110回日本補綴歯科学会総会にて，議決・承認された．

以下に今回対象となった社団法人，NPO法人および中間法人の特徴を表に示す．

法人格の特徴

	社団法人	NPO法人	中間法人
目的	公益（不特定多数の利益）	公益（不特定多数の利益）	共益（構成員の利益）
設立	行政の許可	行政の認証	準則主義（登記）
構成員の資格	審査あり	審査なし	審査あり
所轄官庁	各省庁	内閣府	法務省
課税	原則非課税	原則非課税	原則課税
歯科関係学会	日本口腔外科学会 日本矯正歯科学会*	日本歯周病学会 日本歯科保存学会 日本歯科放射線学会* 日本歯科医療管理学会*	日本小児歯科学会* 日本歯科麻酔学会*

*検討中

（法人化担当委員会　川和忠治）

補綴治療における症型分類の導入

歯科臨床の目的を口腔機能の維持と回復とするならば，当然ながら，補綴診療がその最たる責務を担っていると本学会会員は自負しているはずである．しかし，患者と歯科医の間で，または歯科医間で，その機能回復が互いの共通の「物差し」で理解，納得したうえでなされているのかは不明確である．診療報酬のなかでも，残念ながら現在の「歯科点数表の解釈」本には「咀嚼機能検査については算定できない」と記載されている．このような現状に対して，大山会長はこの「物差し」，つまり，**『チェアサイドでできる咀嚼機能あるいは発語機能の検査・評価法の確立』**を今期の重要な事項と位置づけられた．

一般の疾患，障害では，臓器の機能検査によって，診断，病態把握「症型（障害）分類」がなされ，それによって治療法，対応法が決まり，治療の経過，結果が観察され，患者の納得のもとに治療が進められる．一方，補綴治療のおいては，各

歯科医がおのおのの知識・経験・技量の立場で，患者の欠損（障害）状態を把握し対応しているが，さまざまな病態を明確に表記できる方法を持ち合わせていないのが現実である．

そこで医療問題検討委員会では，**『機能検査の診療報酬への導入』**，**『クリニカルパスの作成』**といった今期の事業計画を遂行するためには，まず補綴治療における症型（障害）分類を作成し，この分類に必要な検査方法をあげ，クリニカルパスを作成していくほうが合理的であるとの方針を決定した．さらには，「補綴にはエビデンスがない」といわれるようなことも，欠損もしくは障害に対しての症型分類を行うことで，各検査法におけるエビデンスの構築も容易になると思われる．そして，**客観的な検査結果から，症型を分類し，難易度を明確に評価することは，これまで曖昧であった補綴の専門性の重要度を増していくことにも寄与する**と考えられる．

平成 15 年 8 月 30 日に開催された第 2 回の委員長会において，この補綴治療における症型分類の導入に向けての作業が認められ，現在，医療問題検討委員会を中心にその作業が進められている．このような作業の戦略としては，非の打ち所のない分類法を確立してから導入する方法もあるが，まず基本となる「たたき台的なもの」を作成，導入し，試行しながらよりよいものにしていくスタンスをとりたいと考えている．ただ，予想されるように複雑多岐にわたる補綴治療を分類する作業は，医療問題検討委員会を中心とする委員会作業だけでできるものではなく，全評議員，全会員の積極的な支持，積極的なご意見があってこそはじめて成し遂げられるものである．作業の細かな情報は今後広報委員会と連絡を取りながら公開していく予定にしており，是非，会員の皆様のご理解とともに，忌憚のないご意見をお願いするものである．

連絡先アドレス：
ichi@dent.tokushima-u.ac.jp（医療問題検討委員会委員長）
kohojps@dent.kyushu-u.ac.jp（広報委員会）

（医療問題検討委員会　市川哲雄）

診療報酬改正に対する学会のかかわり

診療報酬改正は 2 年に 1 度あり，中央社会保険医療協議会（中医協）で審議される．それに先立ち，日本歯科医師会は日本歯科医学会，またその専門分科会から要望を聴取することになっているのだが，その時期がタイミング悪く日本補綴歯科学会の執行部の交代時期と重なっており，いつも慌ただしく検討する必要性に迫られるというのが現状である．本年も急ぎ検討を行い，評議員に対するヒアリングと，前執行部からの引継事項をあわせて，表に示すような項目を医療問題検討委員会でまとめ，日本歯科医学会のほうに提出した．今期の大山会長の掲げた優先課題である咀嚼機能検査については多くの学会からも出されていた．

一方，歯科医師会のなかには**疑義解釈委員会**というものがあり，これは厚生労働省からの種々の診療報酬の諮問に対して答える委員会である．この委員会に対しても補綴歯科学会は委員を出しており，會田雅啓教授（日大松戸），佐藤裕二教授（昭和大）がその任にあたっている．懸案の審議項目に，**「歯ぎしり，咬合挙上副子，顎関節症に関するガイドライン」**があがっていた．すでに，補綴歯科学会にはこれに対するガイドラインがあり，そのガイドラインに従って回答してきた．しかし，厚労省が求めているのは**『病診連携を考慮したもの』**であり，しかも，「咬合挙上副子，顎関節症の幹事学会は日本口腔外科学会」，「歯ぎしりは歯周病学会」であることなど調整が困難をきわめてきたのが今までの経過である．そのため大山会長，河野学術委員長（前ガイドライン委員長）に検討，ご英断いただき，日本補綴歯科学会ホームページで示すような方向でまとまる予定である．

診療報酬の改正には，学問的なもの以上に国の財政的な問題が大きく反映される．しかし，その算定方法には補綴歯科学会としては納得がいかないことも多々あることも事実である．これに対して，補綴歯科学会として 2 年に 1 度の要望書を出すだけでなく，**疑義解釈委員会などのさまざまな委員会でその学問的裏づけをもって主張すると同時に，学会の広報，学術活動，教育現場での指導など，個々の構成員および学会全体での地道な活動が必要**ではないかと考える．また，今期評議員各位からいただいた貴重なご意見を医療問題検討委員会のなかで検討し，次回診療報酬に反映されるようなレポートを作っていきたいと考えている．

診療報酬改正に対する要望事項（2003 年度）

●新規導入項目
1．機能検査（咀嚼機能検査，発語機能検査）
2．支台築造・築造窩洞形成の個別的算定
3．床副子を間接法により調製する場合の咬合採得料の算定あるいはチェックバイトの算定範囲拡大

●現行の歯科診療報酬体系化の既存項目に対する改善点
1．硬質レジン前装冠の適用範囲の拡大
2．有床義歯の咬合採得算定法の改定
3．鋳造鉤算定法の改定あるいは算定拡大
4．床副子の印象採得料増額
5．コンポジットレジンによる残根歯の根面被覆
6．下顎運動検査の適用範囲拡大
7．顎関節症に対する咬合調整回数の制限を見直し

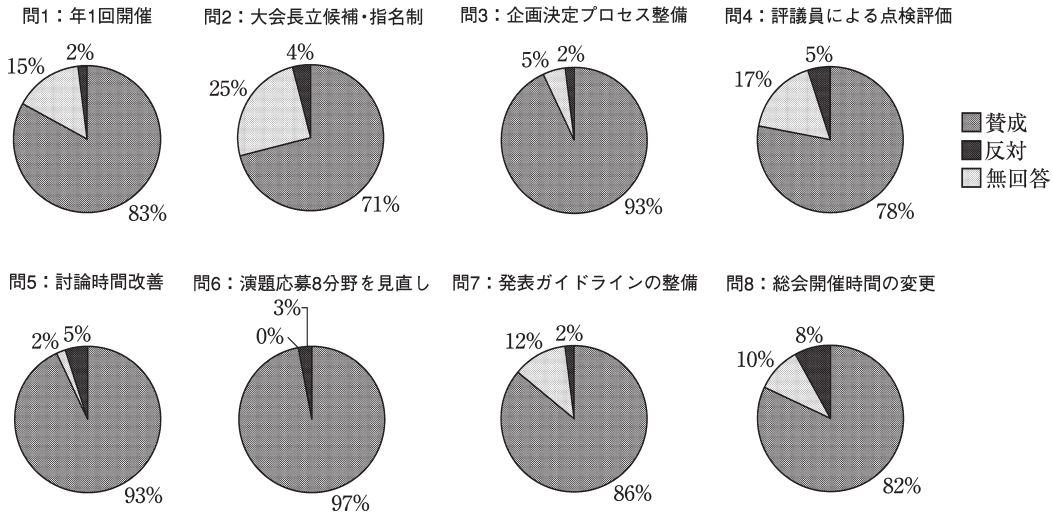
【今後の検討項目】
1．補綴物維持管理料，歯科技工指示書作成に関する処方料など総合的に検討
2．種々の検査法
3．義歯に患者氏名，術者名を入れる．
4．削除項目　パントグラフ，縫成冠など

（医療問題検討委員会　市川哲雄）

学術大会の年１回開催化へ向けて

日本補綴歯科学会年１回化ワーキングでその実現へ向けて検討が行われている．その背景となった2002年春全評議員を対象に行われた「補綴歯科学会の年２回開催の問題点のアンケート結果」を公開する．

	現行の学術大会の問題点	解決策（学術委員会案）	賛成のコメント	反対のコメント
1	年２回の開催 ・学術大会終了までに次の学術大会の企画を立案 ・春の大会は役員の引継ぎの関係で，２年に１回は企画が十分に練れない ・常に演題作成に追われ，締め切り過ぎの応募が40% ・じっくりと研究できず，発表の質が低下 ・現在は２回の性格づけが不明瞭（春は発表主体，秋は企画主体と最初に提唱されて４年半たつが実現していない） ・会期の長期化により，年２回の学会に初日から最終日まで参加することが困難	年１回の開催 メリット： ・じっくりと発表準備を行い，発表の質が向上 ・学術委員会での十分な検討のため，企画の質が向上 ・年１回による大会費用の節減 ・支部学会の一層の活性化 ・参加者の経済的負担の軽減 デメリット： ・発表の機会が減少→支部学会の開催時期を調整，毎月どこかで学会を開催 ・会期の長期化→ポスター発表を増やして日数を縮減 ・企画総数が減り，学会長の意向が十分に反映できず→逆に年１回であるため，十分な企画立案が可能	○会期を長くし，年１回で対応．年２回ならば性格付けを明確にすべき（４名）． ○指導医・認定医更新に関する学会出席回数の減少は考慮すべき． ○関連学会と吸収合併，支部会の充実・相互乗り入れ（７名）． ○日程を土日含めた形に（開業医が参加しやすいように）（２名）．	●発表の機会が減少する（４名）． ●研究発表主体と臨床発表に分ける（６名）． ●一般開業医の参加困難，東西で２回開催．
2	大会長の持ちまわり制	大会長の立候補・指名制	○大会長の役割が不明瞭になってきている． ○ビジョンとやる気のある先生が望ましい（２名）． ○立候補制にし，大会長に権限委譲する（２名）． ○ブロックごとの持ちまわり制（２名）．	●立候補・指名制は偏りが多い．公共性が損なわれるのでは（４名）． ●一部の決定となり，不明朗． ●原則持ちまわり．例外的に立候補を募る（３名）． ●（年２回開催前提）指名制と持ちまわり制を１回ずつ（２名）． ●指名する場合の基準が困難．
3	企画決定プロセスの規定の不整備	企画決定プロセスの整備 ※メインテーマは学会長と学術委員会（大会長を含む）で決定，これに沿った企画を学術委員会で策定後，学術委員会案を委員長会，理事会で検討． ※特定推進研究の範囲は学会長が決定． ※以上について理事会で「申し合わせ」てもらう．	○特定推進研究の範囲は学術委員会または評議員の意見を聞いてから． ○学会長と学術委員会で決定（２名）． ○学術委員の１名は直前大会長を当てる． ○大会長に重みづけを．意向が反映されるような形で（４名）． ○それ以前に学会長と大会長の意見相違を早期に調整してほしい．	●企画については広範な情報が必要． ●学術委員会主導になり過ぎないほうがよい（２名）．
4	学術大会に対する点検評価が不十分	全評議員による点検評価（メール）	○評価基準の設定を早く示し定めてほしい（５名）． ○評価委員会を設置． ○一般会員からの評価も必要では（２名）． ○評価結果をどう生かすか（３名）．	●内容には賛成だが，全評議員には必要ない． ●評価方法が難しい． ●選考されたメンバーのほうがよい（２名）．
5	実質的な討論時間が短い	※座長の演者紹介は番号，氏名だけに ※質問者はあらかじめマイクの前へ ※形式的な挨拶の廃止 ※ポスターの割合を増やすことで調節	○座長による時間の厳守（３名）． ○研究発表のための学会を開催． ○マイクの数を増やす．質疑時間は最低４分確保． ○演題数を減らす（２名）．	●討論で要点のみを述べるように． ●発表者個人の問題．
6	演題の応募分野「その他」が増加	従来の８分野を見直し ※特定推進研究の10領域との整合性 ※ IADR 式のコード分類なども検討	○分野を増やし同時進行（２名）． ○研究が多岐にわたってきたので分野を決めない（２名）．	
7	細かすぎる文字・表・グラフが散見	発表のためのガイドラインを整備 ※見本スライドの作成 ※用語は「用語集」に準拠	○表，グラフは要点を記述． ○PC を使った発表についても検討してほしい． ○用語集の見直しなどを積極的に進めてほしい（４名）． ○聴衆にわかりやすい大きさに．	●ガイドラインから外れた場合の取り扱いが不明． ●研究の質の向上に取り組むほうが先決（２名）． ●規制は場合によって好ましくない． ●発表者個人の問題（２名）
8	総会の形骸化	総会開催時間の変更	○総会廃止．会員への必要事項は HP もしくは誌上で． ○一般講演，特別企画の合間に設定． ○時間を変えても同じ（６名）． ○昼休みは避けたほうがいいのでは（３名）． ○会員には HP で理事会の決定を知らせ，意見などはメールで（総会の省略可）（２名）．	



〔副会長（前学術委員長）赤川安正〕

国際渉外からのお知らせ

国際学会ご案内

● **アジア補綴学会（AAP）**

2003年11月14，15日に台北市で開催された．JPSからの招待講演者として，平井敏博教授（北医大），佐藤裕二教授（昭和大）が講演された．

● **第31回インド補綴学会（WCP）**

2003年11月26〜29日，ニューデリーにて開催予定である．

● **GNYAPとのJoint Meeting**

2003年12月5〜6日ニューヨークプラザホテルにて開催されるが，招待講演として，市川哲雄教授（徳大）が予定されており，JPSからのポスター発表として13題が受理され，大山会長をはじめ約50名の学会参加が見込まれている．

● **American Academy of Fixed Prosthodontics**

2004年2月20，21日シカゴにて開催予定である．

● **大韓補綴歯科学会（KAP）との第2回のJoint Meeting**

2004年5月21，22日に東京都で開催予定．同大会は第111回日本補綴歯科学会学術大会時（大山喬史大会長）に同時開催する．

AAPに関連するお知らせ

● **Asian Academy of Prosthodontics（AAP）に関して以下の申し合わせ事項が決定された．**

① AAP Executive Council（役員）の推薦に関しては，日本補綴歯科学会として対応する．

② Regional Representativeは日本補綴歯科学会会長をあてる．

③ AAP役員3名は日本補綴歯科学会会務連絡会から，副会長，庶務担当理事，国際渉外委員長をあてる．

④ AAP役員は，日本補綴歯科学会の任期にかかわらず，原則，1期2年とする．ただし，Vice PresidentやPresidentなどの推薦が想定される場合には，別途協議する．

⑤ AAPの状況が変化した場合には，別途，検討する．

⑥ この申し合わせは，平成15年10月23日から施行する．

（国際渉外委員長　古谷野　潔）

日本歯学系学会連絡協議会設立
Union Council of Japan Dental Sciences

平成15年7月22日，第19期の「日本学術会議」会長として，黒川　清先生（東海大）が就任され，その歯学の学術会議会員として，小林義典先生（日歯大/咬合学），堀内　博先生（前東北大/齲蝕学・歯周病学），伊藤学而先生（鹿大院/口腔機能学）が任命された．

さらに平成15年9月16日には，**歯学系の研究・教育の推進とその成果の普及に関する日本学術会議（別枠），行政機関，産業界および国民への提言と啓発を目的とする「日本歯科系学会連絡協議会」**の設立会が，日本学術会議講堂で行われ，初代会長には赤川安正先生（18期咬合学研連・幹事委員）が就任された．日本補綴歯科学会は，この協議会の趣旨に賛同し入会することとし，協議会への代表担当者を学術委員長の河野正司先生とした．このことは，第110回日本補綴歯科学会総会で報告された．

この会の設立の目的は以下の通りである．

1．歯学は今，医学との関係や，ほかの学問領域との連携を見直し，歯学部の再編・統合など，多くの課題に直面している．

2．歯学が国民の付託に応えるためには，社会の要請を踏まえた学術研究の推進，国民の健康と

福祉の向上への貢献，国民・政府・歯科界に対する発言と提言が必要である．

3．このためには，歯学の各研究領域を網羅する連絡組織を設立し，学会（研究者）相互の情報交換と意志疎通を緊密にする必要がある．

4．本協議会は加盟各学会によって運営され，歯学の学術研究上の諸問題に関する協議を提言，並びに日本学術会議との連絡を通じて，歯学研究の推進と普及，国民の健康福祉の向上を図ることを目的とする．

同協議会は既存する日本全国の歯科学に関連する40以上の学会から主旨，賛同を得て誕生したものである．

〔別枠〕

「日本学術会議」とは，1949年に内閣総理大臣の所轄のもとに「特別の機関」とし設置され，中央省庁再編に伴い総務省に置かれている．日本の人文・社会科学，自科学分野の科学者の意見をまとめ，国内外に発信する日本の代表機関であり，全国73万人の科学者の代表として選出された210名の会員により組織されている．その活動は主に，科学に関する重要事項の審議，科学に関する国内外の研究の連絡である．

☞ニュース　論文作成費用について

［日本補綴歯科学会雑誌投稿規定より］

より明瞭になった投稿料金を紹介

1）掲載料

(1) 編集委員会から依頼した総説，または依頼論文は無料．図版でカラー印刷希望の場合，実費著者負担とする．

(2) 原著，技術紹介，症例報告，認定医症例報告は1〜6頁（6,650円/頁），7〜10頁（14,000円/頁）．ほかに英文添削代は標準が2,905円，図版代（図1枚664円，写真1枚830円）．図版でカラー印刷希望の場合，実費著者負担とする．

2）別刷

(1) 編集委員会から依頼した総説，または依頼論文の別刷は100部までを無料とし，101部以上の場合，1部92円，ただし送料は無料とする．

(2) 原著，技術紹介，症例報告，認定医症例報告の別刷は50部以上1部92円とし，ほかに別刷作成費表紙として4,980円，送料を1,500円とする．

（編集委員会）

優秀論文賞対象枠の拡大へ

学会論文賞にノミネートされる論文は本学会雑誌に掲載された学術論文に限られていたが，対象が拡大され，よりグローバル化された視点で論文を選考するための会則規定の改正がなされた．

表彰制度（優秀論文賞）に関する規定の改正

以下会則13条より17条まで（改正後のみ）

※太字アンダーライン部が改正された箇所．

（資格）

第13条　学会論文賞は次の号のすべてに該当する者に授与する．

(1) 表彰時期前年の1月から12月までに本学会雑誌，**歯科補綴学関連雑誌**に掲載された学術論文の著者であること．

(2) 10年以上継続して本学会会員であること．

第14条　中堅優秀論文賞は，次の号のすべてに該当する者に授与する

(1) 表彰時期前年の1月から12月までに本学会雑誌，**歯科補綴学関連雑誌**に掲載された学術論文の著者であること．

(2) **本学会雑誌以外の学術誌に掲載された学術論文は，その内容を本学会学術大会において発表していること．**

(3) 学術論文の受理時期において36歳以上で，且つ7年以上継続して本学会会員であること．

第15条　特定推進研究優秀論文賞は，次の号のすべてに該当する者に授与する．

(1) 表彰時期前年の1月から12月までに本学会雑誌，**歯科補綴学関連雑誌**に掲載された，本学会が定める「特定推進研究」領域の学術論文の著者であること．

(2) **本学会雑誌以外の学術誌に掲載された学術論文は，その内容を本学会学術大会において発表していること．**

(3) 7年以上継続して本学会会員であること．

第16条　奨励論文賞は，次の号のすべてに該当

する者に授与する．

(1) 表彰時期前年の1月から12月までに本学会雑誌，**歯科補綴学関連雑誌**に掲載された学術論文の著者あるいは共著論文であるときは筆頭著者であること．

(2) **本学会雑誌以外の学術誌に掲載された学術論文は，その内容を本学会学術大会において発表していること．**

(3) 学術論文の投稿受理時期において35歳以下で，且つ3年以上継続して本学会会員であること．

（募集）

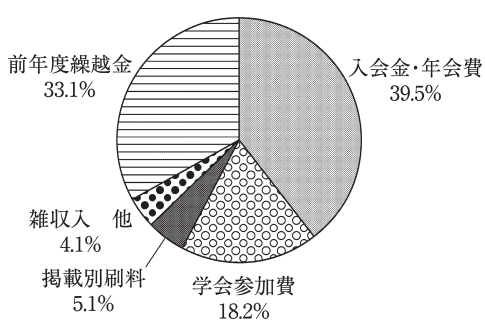
第17条　**中堅優秀論文賞，特定推進研究優秀論文賞及び奨励論文賞**の募集は，本学会雑誌においておこなう．

平成15年10月24日一部改正（平成15年10月24日施行）

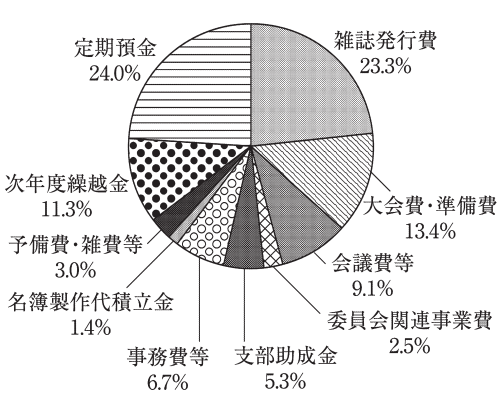
（会則検討委員会　細井紀雄）

日本補綴歯科学会の財政

第109回日本補綴歯科学会総会において平成14年度決算が承認された．歳入および歳出の総計は166,638,903円であった．以下円グラフにて示す．



平成14年度学会歳入



平成14年度学会歳出

（会計委員会　櫻井　薫）

第110回学術大会報告

平成15年10月24日（金）～26日（日）に長野市の“長野県民文化会館”において甘利光治大会長（松歯大）のもと開催された．口演，ポスター発表あわせて157題の演題が発表され，1,700余名の参加者があった．

以下に企画講演についての報告をする．

特別講演「ハイリスク患者への歯科治療」

特別講演講師に予定されていた田中康夫県知事の不都合により，急遽，講師となられた笠原　浩先生（松歯大院）の講演トピックスは，有病高齢者には特有のリスクが存在し，それにいかに対応すべきかということであった．歯科的介入によって重大な症状を招く可能性が多いことを認識する必要があること，歯科での重大な医療事故は新患や急患で起こる確立が高いため，処置に入る前に必ずバイタルサインをとる習慣性を身につけることが事故防止につながること，また急激な循環動態の変化やショックなどの危険な状態を引き起こす引き金となる「痛み」の回避を計るため，患者の不安や恐怖などの精神的ストレスを緩和する思いやりとともに，確実な無痛法のマスターが大切であることを述べられた．高齢社会における歯科医療に対しての警鐘であった．

（広報　冲本）

講演される笠原先生

シンポジウム「咀嚼筋に下顎位を語らせる」

シンポジウムⅠでは「咀嚼筋に下顎位を語らせる」として河野正司先生（新大院）を座長に，森本俊文先生（松歯大）と平井敏博先生（北医大）の講演が行われた．

まず座長の河野先生から2つの咬合挙上症例を提示され，2cm近い咬合挙上に本当に筋は適応するのか，咬合の挙上をすべきかどうかの判断はどう行えばよいのかという問いが投げかけられ，2人の講師の先生のお話が始まった．

森本先生から「咬合高径と筋感覚」という演題で講演がなされ，下顎位感覚を利用した義歯の咬合高径決定法について解説があった．スクリュー

左から平井先生，森本先生

ジャック法を用いて咬合高径を高いほうから徐々に低くしていく場合と，逆に低いほうから徐々に高くする場合では，ちょうど良い高さだと患者が感じる位置（上弁別位置と下弁別位置）にある程度のギャップ（Comfortable Zone；CZ）があり，最適な咬合の位置は違和感を感じない範囲であるCZの上弁別位置寄りに存在することがわかったこと，このことはモルモットやウサギを使った動物実験からも証明され，筋紡錘から伝えられる刺激が咬合高径の決定に重要であることが示された．

次に平井先生から「下顎は筋が動かす―歯科補綴臨床における下顎位の設定―」という演題で講演がなされ，下顎運動が直接的には三叉神経系によって制御されているが，その働きが脳の広い範囲と関連している可能性について解説された．咀嚼機能の低下がアルツハイマー病の危険因子の1つといわれており，咬合がQOLにとって非常に重要な意味をもつことが示された．下顎半側切除の症例や義歯床縁形態の付与とともに苦労した症例などが提示され，補綴装置の如何にかかわらず，患者に付与する下顎位が正常な筋機能を保証し引き出すものであることが大事ということを述べられた．

また，討論では，機能と形態について，いい状態にあればおのずと形態も整い，機能と形態は一致するとの意見でまとまった．

（広報　諸井）

シンポジウム「SDA（短縮歯列）のコンセプト―その運用と限界：その2」

本シンポジウムテーマは109回大会の続編であり，多数の会員の関心を集めたこの問題に対していっそうの論議が必要ということで企画されたものである．

まず座長の五十嵐順正先生（松歯大）により，前回のシンポジウムの概要，IADRでのシンポジウム，外国でのリサーチの開始などの情報が披露された．

服部佳功先生（東北大院）の講演は，力学的観点から，残存歯，顎関節などに対する機能力の変化を，現在までのデータから詳細に考察された．

シンポジウム演者↑

座長の五十嵐先生→

続く山下秀一郎先生（松歯大院）の講演では，SDAに対する処置方針の分岐点となる基準にアプローチがなされた．主観的評価，客観的評価を把握することが大事であり，疫学的な調査と咬合支持と下顎変位との関連性の実験から考察された．荒井良明先生（新大）は，可撤性義歯装着が咀嚼から嚥下までのトータルな機能への影響の検討が大事であることと，遊離端欠損の咀嚼機能に及ぼす影響について論じられた．笛木賢治先生（東医歯大院）は，現在までの研究のレビューと，可撤性補綴装置で補綴する際の回復すべき歯列の長さについて論じられた．いずれの講演もインパクトのある素晴らしいものであった．

この問題には，歯科補綴学の根幹にかかわる部分もあることが披露されており，今後とも本テーマは，さらに科学的・多角的に検討され，コンセンサスを得て行かなければならない問題である．

（広報　貞森）

臨床教育研修「パーシャルデンチャーの設計方針について」

「パーシャルデンチャーの設計方針について」と題して臨床教育研修が行われ，石上友彦先生（日大）を座長として，馬場一美先生（東医歯大院），澤田宏二先生（新大院），池邉一典先生（阪大院）の3名にご講演いただいた．

まず石上座長が，臨床では部分床義歯の設計は歯科医師の経験に委ねられていて，本研修の目的は，その経験の裏づけとなる要素を整理し，バラ

左から池邉先生，澤田先生，馬場先生

ンスのとれた設計やその一助となる得る臨床的指針を示すことであると述べられた．

馬場先生は，まず北米の調査結果から，義歯設計は技工士任せの場合が多く，これは卒前教育の不足のためと言及された．そして教育プログラムの充実のためには義歯設計の標準化が必要であること，また設計原則は義歯の垂直性遠心回転，水平性遠心回転，頰舌回転の 3 つの運動様式の制御であり，近心レストとエンブレジャーフック，反対側には双子鉤という設計の具体例を示された．

続く澤田先生は，義歯設計の三要素は「力」を考慮すると支持，把持，維持の順番となり，その根拠と設計手順について教室の研究データをもとに述べられた．支持はレストの要件と力の伝達を考慮すること，把持は隣接面板や小連結子を三次元的に考えること，維持は回転軸の集中部よりも前方に間接支台装置を設置することなどを示された．

最後に池邉先生は，長年の教室の研究とアイオワ大での経験をもとに，噛める・咀嚼できる義歯の大切さを強調された．具体的には咬合，つまり排列位置を考慮してレストと義歯床に支持機能をもたせ，次に把持機構，最後に維持機構と設計を進めると述べられた．また，補綴前処置の必要性も力説された．

以上のように，各講師の講演内容はいずれも，部分床義歯設計の基本方針を順序立てて，科学的根拠をもとに具体例を示したものであり，卒後間もない者にも非常に理解しやすく，また経験豊かな者には再確認を促した，有意義な臨床教育研修であった．

（広報　松山）

研究教育研修「質的研究と歯科医療 ―質的研究は歯科医療に何をもたらすか―」

研究教育研修シリーズの最後として，“質的研究”が取り上げられ講演が行われた．最初にこのシリーズを企画し座長でもある佐藤裕二先生（昭和大）から，過去のエビデンスシリーズの総括として，エビデンスを「創る」，「測る」，「使う」，そしてそれに続く EBM と NBM の概説がなされた．

講師の大谷　尚先生（名大院）は質的研究における日本の第一人者であり，最初に質的研究とは何かという観点から，「星の王子さま」の一説を引用され，“研究対象を，数・量においてではなく質において理解し，それを十分な科学性を有したものにする”という本質的な部分から講演の導入がされた．そして，私たちが日常的に行っている量的研究との比較・系譜と続き，質的研究における実際のデータ採取・作成・分析・理論化の方法が提示された．さらに，大谷先生が今回の学術大会の抄録を読まれたなかで，質的研究手法がすぐにでも採用できそうなテーマとして，“患者―医師関係”（患者―医師関係についての思考実験・九大院グループ，写真）と“主観的症状の推移”（顎関節症の主観的・客観的症状の推移・岡大グループ）の 2 つをあげられた．最後に「質的研究者は必ず量的研究手法を学ぶべきで，量的研究者も質的研究手法を学ぶ時代にきている」というお話が強く心に残る講演であった．

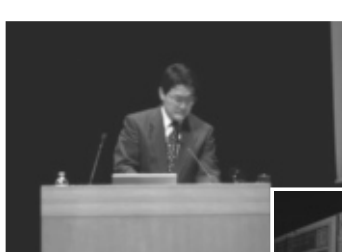
（広報　北川）

技術・技工セッション「CAD/CAM システムによる審美修復の現状―臨床と技工の連携―」

このセッションでは国内外の CAD/CAM システムによる審美修復について歯科医師と技工士のそれぞれの立場で解説がなされた．

国産のシステムである GN-1 について内山洋一先生，渡部貞義先生（北医大）から解説があった．メラミン歯を形成した模型をもとに実際に GN-1 でジャケット冠を制作する手順が示され，ステインなどの比較的簡単な操作で審美的な修復が可能であるとの説明であった．また実際に当大学病院では月に 15 件ほどと着実に症例件数も増えており，有効な審美修復として定着しているようであった．

次に海外のシステムであるプロセラについて上林　健先生（ナチュラルセラミクス），小濱忠一先生（小濱歯科医院）から解説があった．これまで強度的な問題などによりメタルセラミックを第



講演される大谷先生↑

九大院グループの
ポスター発表→

↑技術・技工セッション
演者

←感謝状授与

一選択としていた審美修復であったが，十分な強度と光透過性，そしてメタルコアや支台歯のディスカラレーションのマスキング効果を有するコーピングが可能になるなど，審美修復の治療概念と対応方法を変えつつあるとのことであった．

審美修復の進化や省力化をかなえる両システムであるが，その実力を遺憾なく発揮するためには歯科医師と技工士のコミュニケーションであり，それなくして審美修復はかなえられないということであった．

（広報　諸井）

認定医研修「認定医として知っておきたい歯科的対応―ブラキシズム・オーラルジスキネジア・睡眠時無呼吸―」

学会最終日に，第 9 回認定医研修会が開催された．認定医研修は，「認定医として知っておきたい歯科的対応―ブラキシズム・オーラルジスキネジア・睡眠時無呼吸―」のテーマで，座長に皆木省吾先生（岡大院），講師に加藤隆史先生（松歯大総歯研），志賀　博先生（日歯大），菊池雅彦先生（東北大院），鱒見進一先生（九歯大）の 4 名の先生方をお招きして講演が行われた．

まず座長の皆木先生から，今回のテーマである 3 つの顎口腔系機能異常に対して，社会の高度情報化により国民の治療に対する要求が専門的で多様化してきているにもかかわらず，われわれが系統だった教育を受けていないために，早急に適切な歯科的特に補綴的アプローチを研修する必要があることを示された．

まず，一番手の加藤隆史先生は，『ブラキシズムの基礎：science と dogma』と題して，生理学的観点からブラキシズム発生のメカニズムを検証され，臨床的対応の位置づけについて示された後，臨床症状との関連ついて報告された．

二番手の志賀　博先生は，『ブラキシズムの臨床』と題して，臨床的観点からまずブラキシズムの原因や症状について詳しく説明された．その後，管理としての治療法（対症療法）を列挙され，そのなかのスプリント療法や咬合療法はわれわれ歯科の分野で取り扱えるが，適応基準の難しさを示された．

三番手の菊池雅彦先生は，『オーラルジスキネジア』と題して，その症状を説明され，発症原因により 4 つに分類された後，歯科的アプローチとして 2 つの異なる方向性（義歯不適合などの根本的原因を除去するための治療，治療の障害とならないように薬物の投与や変更などを医師に依頼）があることを示された．

四番手の鱒見進一先生は，『睡眠時無呼吸症候群に対する歯科的対応』と題して，睡眠時無呼吸症候群の定義や疫学・リスク要因・診断法・治療法について説明された後，歯科的対処法としての下顎前方牽引装置の製作方法や治療効果について報告された．

ディスカッションでは，会場からも質問があり活発な討議がなされたが，最終的にはそれぞれの顎口腔系の異常に対して的確な診査・診断を行ったうえで，歯科的対応が可能な部分においては治療を行い，医科との連携を密にする必要があることが強調された．

認定研修と同時に行われた認定医申請ケースプレゼンテーションでは，2 ケースと少なかったものの，いずれもインプラント補綴治療を行った症例で，熱のこもった審査が行われた．

（広報　濵野）

認定医ケースプレゼンテーション会場

110 回課題口演コンペティション受賞者

第 110 回学術大会より新たな課題「チェアサイドにおける咀嚼・嚥下機能，発語機能評価」が追加され，エントリー総数 24 題の口演のなかから，以下の 8 演題が受賞した．なお選考は事前に選ばれた選考委員 8 名の投票により行われた．

（日-会場-演題）　　○受賞者

1-1-4　試験用グミゼリーを用いた咀嚼能率測定法の正確性と再現性
○森居研太郎，池邉一典，古谷暢子，柏木淳平，松田謙一，和田誠大，野首孝嗣（阪大院）

1-1-5　チェアサイドでできる咀嚼機能評価システムの開発
○浅川昭典，笛木賢治，大山喬史，高橋弘之，中田　睦*（東医歯大院，*井上アタッチメント）

1-1-7　チェアサイドで行える咀嚼能力評価法の開発
○本間　済，河野正司，小林　博，櫻井直樹（新大院）

1-1-9　パラトグラムを用い作製した義歯により改善困難な「カ行」を回復した舌切除 3 症例
○佐々木具文，伊藤秀美，村山　聡，千葉和彦，佐々木啓一（東北大院）

1-1-11　カンジダと誤嚥性肺炎原因菌の共凝集

―バイオフィルム形成能と抗菌薬感受性―
○大村直幹，弘田克彦，柏原稔也，永尾　寛，市川哲雄（徳大）

1-2-3　Er：YAG レーザー照射象牙質の脆弱層（レーザースメア層）と接着強さ
○峯　篤史，鈴木一臣，矢谷博文*，吉田靖弘，窪木拓男（岡大院，*阪大院）

1-2-4　骨粗鬆症ラットにおけるチタン周囲骨形成に対する高脂血症治療薬シンバスタチンの効果
○鮎川保則，岡村　亮，安川英輔，古谷野　潔（九大院）

1-2-9　ストレス時における視床下部室傍核の neuronal nitric oxide synthase（nNOS）発現と噛む事による影響
○堀　紀雄，本木克彦，青木宏道，湯山徳行，笹栗健一，佐藤貞雄，豊田　實（神歯大）

110 回大会デンツプライ賞受賞者

第 110 回学術大会のすべてのポスター発表 83 題の中から，評議員による投票で以下の 6 演題の受賞が決定した．

（日-会場-演題）　　○受賞者
1-3-19　ファイバーポストを用いた支台築造の応力解析
○大山龍男，中村俊雄，中村隆志，矢谷博文（阪大院）

1-3-37　異なった補綴装置を装着した高齢者の口腔内環境に関する縦断研究
○田中順子，西川　学，古藤美帆，龍田光弘，田中昌博，川添堯彬（大歯大）

2-3-11　閉塞型睡眠時無呼吸症患者における咬筋筋活動の終夜睡眠ポリグラフによる検討
○猪子芳美，清水公夫，大沼智之，森田修己，河野正己*（日歯大新潟，*いびき診療センター）

2-3-12　岡山大学第二補綴科における顎関節症の初診から終診までの主観的・客観的症状の推移
○濵中麻衣，有馬太郎*，阪口貴盛*，皆木省吾*（岡大，*岡大院）

2-3-29　二酸化チタン光触媒応用レジンの開発―抗菌効果について―
○柴田武士，田中欽也，木本克彦，兼松恭規，澤田智慈，熊田秀文，浜田信城，梅本俊夫，野浪亨*，豊田　實（神歯大，*産業技術総合研究所）

2-3-38　Deflection Fatigue of Ti-6Al-7Nb Alloy Cast Clasps
○ Mahmoud A, Wakabayashi N, Takahashi H, Ohyama T（Tokyo Medical and Dental Univ., Japan）

国内関連学会報告

第 14 回日本咀嚼学会学術大会報告

9 月 11（金）から 13 日（土）に徳島大学・大塚講堂（蔵本キャンパス）おいて，大会長：坂東永一先生，準備委員長：中野雅徳先生のもと第 14 回日本咀嚼学会が開催された．本年 1 月から新理事長に小林義典先生が就任され新執行部における初めての学術大会である．

最初に，シンポジウム 1 として“健康増進，QOL 向上のための咀嚼に関する研究戦略―咀嚼研究に関する分野別レビューと学際的研究への展望―”と題して前田憲彦先生（広大院），坂東永一先生（徳大），平井敏博先生（北医大），神山かおる先生（食品総合研究所），山田好秋先生（新大院）らが講演された．

さらに，市川哲雄先生（徳大），北出修子先生（徳大），紙屋克子先生（筑波大）が講師を務められた公開フォーラム“質の高い長寿を支える咀嚼・嚥下”には，多数の会員外の医療関係者や学生に加え，一般の方の参加も認められ，テーマに対する関心の深さがうかがえた．

また，“エネルギー摂取の大切さ”と題した，山本　茂先生（徳大）の公開特別講演のほか，さまざまな分野から 16 題の口頭発表が行われ活発な質疑応答がなされた．

最終日の午後にはシンポジウム 2 として “下顎運動からみた咀嚼”をテーマに秀島雅之先生（東医歯大院），竹内久裕先生（徳大），中田　稔先生（九大院），Hans Walter Lang 先生（ドイツカボ社研究所）から最新の研究成果を含んだ講演が行われ，学際的な大会も盛会裡のうちに幕を閉じた．

（広報　北川）

シンポジウム 1 演者

第 20 回日本顎顔面補綴学会総会

9 月 26 日（金），27 日（土），横浜市の鶴見大学会館にて，瀬戸晥一教授（鶴見大）を総会長として第 20 回日本顎顔面補綴学会総会が開催され

た．一般演題 35 演題に加え，会長講演，シンポジウム，特別講演，教育研修会，さらにはランチョンセミナーと，休憩なしの盛りだくさん，かつ一つひとつ密度の濃い企画であった．

特に，会長講演「補綴からリハビリテーションへ」では，学会を創設以前から導いてこられた瀬戸総会長の，顎顔面補綴に対する長年の想いと多くの経験，今後の展望が凝集されていた．

また，シンポジウム「軟口蓋欠損に対する機能回復―手術と補綴とリハビリテーションの調和を求めて―」や教育講演「エピテーゼによる顎顔面の形態的，機能的回復」というテーマは，実際の顎顔面補綴臨床で直面する難問であり，今後の臨床に十分に活かせる内容であった．そして，いずれの一般口演でも，本学会の特徴の 1 つである熱く激しい質疑応答がなされた．

学会終了後は AFOC サマーセミナーと「市民のための夕べ」も開催され，盛況のうちに終演した．

（広報　松山）

第 20 回日本障害者歯科学会学術大会

今回の学会は，東京都歯科医師会主管（大会長：貝塚雅信，実行委員長：内山文博）で，2003 年 10 月 18，19 日に文京シビックセンターで開催された．

第 20 回大会という節目の記念大会ということで，障害者歯科の原点に立ち戻り，「いつでも，どこでも，誰でも，質な医療」を地域医療の目標とされていた．

本学会は運営面では大学と歯科医師会が交互に主管することも 1 つの特徴である．また，今回のメインテーマからも感じられるように，学際的で地域との関連が深く，日本補綴歯科学会に比べより医療面が強い性格の学会と思われた．本学会の始まりは小児歯科関係が多かったようだが，日本の疾病構造の変化などにより，高齢障害者に対しても関心が移り，補綴学ともさらに関連が増してきていると思われる．

記念講演 1 題，記念シンポジウム（基調講演 1 題），教育講演 4 題，歯科衛生士シンポジウム，歯科衛生士教育講演，教育講座 5 題が企画されていた．補綴歯科学会では現在症型分類などについて検討が行われているが，本学会の記念講演では蜂須賀研二教授（産業医大）により，「国際生活機能分類と医療における活用」として，2001 年 5 月に世界保健機構で改訂が採択された国際生活機能分類（1980 年に世界保健機構にて採択された WHO 国際障害分類の改訂版）の説明，実際的利用についても講演がなされた．補綴学にも示唆に富んだ内容であった．

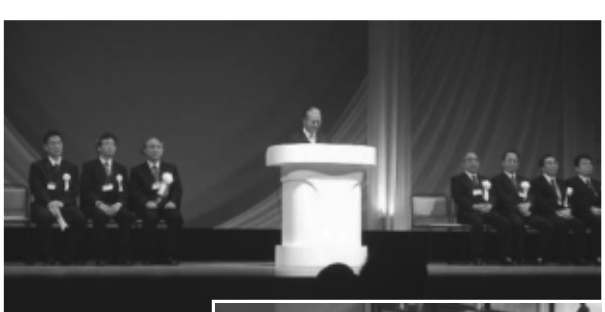
補綴歯科学会関係者では，教育講演 1 で，「摂食・嚥下障害に対する統合医療の試み」というテーマで，植田耕一郎助教授（新大院）の講演が行われた．

また，20 回という記念すべき大会で，補綴歯科学会の大山喬史教授（東医歯大院）と濱田泰三教授（広大院）に功労賞が授与された．

都民公開講座では講師にアグネス・チャン氏を招き行われ，同時進行の形で，植松　宏教授（東医歯大院）を座長として，厚生労働科学研究成果発表シンポジウム「痴呆性老人に対する歯科医療の問題点と対処」が開催された．補綴歯科学会関係者としては，森戸光彦教授（鶴見大），菊池雅彦助教授（東北大院），植田耕一郎助教授（新大院），そして貞森紳丞助教授（広大院）が講師を務められた．当初の予想におおいに反して，多数の出席者で会場が一杯となり，社会的に関心が高いことを感じた．

現在補綴歯科学会も種々の取り組みがなされているが，そのような取り組みの参考になる有意義な今回の学会であったというのが感想である．

（広報　貞森）



開会式↑

ポスター発表と
業者展示→

優れた機能性と
高い審美性を追求しています

Nobel Biocare™

ノーベル・バイオケア・ジャパン株式会社
〒108-0074 東京都港区高輪3-26-33 秀和品川ビル6F
TEL. 03-5423-4491 FAX. 03-5423-4521
http://www.nobelbiocare.com

第14回日本歯科審美学会学術大会

平成15年11月1日（土），2日（日）に，第14回日本歯科審美学会が，大会長・新谷英章教授（広大院），準備委員長・冨士谷盛興助教授（広大院）のもと，広島県歯科医師会館，エソール広島において開催された．

メインテーマを「美しい笑顔と審美歯科」とし，『患者さんが癒される審美歯科』にスポットを当て，さまざまな観点からプログラムが組まれていた．

牟田泰三広島大学長による特別講演「星と宇宙」，日本歯科審美学会会長の石橋寛二教授による会長講演「歯科審美の社会的評価に関する一考察」，韓国歯科審美学会会長のJong-Yeop Lee教授による教育講演Ⅰ「韓国の審美歯科事情」，日本補綴歯科学会会長の大山喬史教授による教育講演Ⅱ「口もとの美」が行われた．

シンポジウムでは，『審美歯科における癒し』と題して，伊藤あづさ先生（東北福祉大）が「癒しの環境」，武智宗則氏（タカラペースデザイン）が「癒しの診療室」，椿　智之先生（ティスアート）が「癒しの診療」を講演された後，活発なディスカッションが繰り広げられた．

テーブルクリニックでは，新野まりあ先生（ハロートゥモロージャパン）が「癒される治療とは．患者さんの心をつかむ審美治療」，飯山賢一氏（ジーシー）が「ITと審美歯科技工…患者さんの情報を伝達するには」について，視聴覚設備を駆使して講演された．

市民フォーラムでは，『白い歯と美しい笑顔』のための情報を市民の皆様に提供するために，日本歯科審美学会副会長の松尾　通先生が「笑顔は地球語」，永井茂之先生（永井歯科診療室）が「歯を白くするには」，和田優子氏（ミス日本コンテスト大会委員長）が「ミス日本にみる美人の変遷」をそれぞれ解りやすく講演され，2003年度ミス日本グランプリでTVキャスターとして活躍中の相沢礼子さんによるトークショーとともに，とても楽しい時間を過ごすことができた．

一般発表はすべてポスター発表で，34題の発表があり，2日目に行われた1時間のディスカッションタイムでは，熱気のこもった討論が行われた．

アロマに包まれた会場には座る席がないほど，大勢の方の参加があり，とても有意義な2日間であった．

（広報　濵野）

会員の声

これからの補綴歯科学会の担い手となる若い研究者の声を紹介する．

ICP受賞者の声

竹内真帆
広島大学大学院医歯薬学総合研究科
先端歯科補綴学研究室

本年7月10日からの4日間，カナダのHalifaxにて開催されましたThe 10th Meeting of the International College of Prosthodontists（ICP）にて，Poster Awardを受賞しました．私の発表は，“A Novel Biochemical Modification of Titanium Implant with Phospho-Amino Acid”で，チタン表面へ結合親和性の高いリン酸基に着目し，接着性タンパク質の基礎分子であるアミノ酸をチタン表面に化学的に結合させる可能性について表面科学的に検討した研究です．発表翌日に6題のポスターがEducation and Research Committeeからノミネートされ，そのなかから最終的に選ばれた2題がICP Banquetの場で表彰されました．1st Placeは FinlandのA. Tezvergil先生が，2nd Placeは私が受賞したと知り，大変驚くと同時に言葉にできないほど嬉しく，今後の研究への大きな励みとなりました．

次回の11th Meeting of ICPは2005年5月にギリシャのThe Island of Creteで開催されます．皆さんもぜひ参加されてはいかがでしょうか．

第109回大会デンツプライ賞受賞の言葉

伊山　慎二
九州大学大学院歯学研究院
口腔機能修復学講座

平成15年度日本補綴歯科学会デンツプライ賞をいただき光栄です．受賞発表の内容は，補綴学的咬合平面の左右的傾斜がボディーバランスに及ぼす影響を検索するために，咬合平面の傾斜の有無で分類した2群間で閉眼時の重心動揺反応を比較したというものです．

卒業して10年目になりますが，常に臨床に対する疑問を抱き続けているように思います．研修医を経て大学院に進学したときのテーマは，臨床からはやや距離のあるものでしたが，振り返って

みますと基礎研究にふれた4年間が今の私を支えているのだと思います．「咬合とからだ」は私の生涯のテーマと考えています．今後医学部病院との統合などをひかえ，このテーマに学際的に取り組めるかどうかが，新しい世紀における医学，歯学の将来にとってのカギではないかと思っておりました矢先に，このような高い評価をいただいたことで，改めてこのテーマの重要性を認識するとともに，今後の研究活動に光がさした思いがいたします．この受賞をバネに，これからの歯科界の発展に少しでも貢献できればと思っております．

最後に，研究にご理解と終始にわたり懇切なご校閲をいただきました，九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座咀嚼機能再建学分野の古谷野　潔教授，築山能大助教授に心からお礼申し上げます．

日本補綴歯科学会認定研修機関（乙）取材報告

医療法人・貴和会

東京の中心，銀座の一等地．中央通りに面したビルの7階に貴和会銀座歯科診療所がある．ここで，貴和会新大阪歯科診療所の院長でJIADS歯科医研修所の理事長でもある中村公雄先生にお話をうかがった．

貴和会は，昭和59年に同じ大阪大学出身の小野善弘先生と中村先生が大阪にO-N Dental Clinic（現・医療法人貴和会歯科診療所）を共同開業したところから始まる．昭和63年にボストンのThe Institute for Advanced Dental Studies（IADS）との姉妹団体としてThe Japan Institute for Advanced Dental Studies（JIADS）を発足された．IADSはDr. Kramer，Dr. Nevinsが主宰するペリオと補綴のスペシャリストのための機関であり，ペリオと補綴はもちろんインプラントの臨床研究と教育においても全米のリーダーシップをとっているとのことである．JIADSはボストンの本部ときわめて密な連絡をもち，東京と大阪で研究会と毎月数回の卒後研修を行っている．診療所は新大阪と千里と銀座に，研修所は東京と大阪にあり，10名以上のDoctorが勤務されているとのこと．そのなかで，現在2名の先生が補綴歯科学会の会員として“認定医”を目指して研鑽を積まれている．ここでは，当初の3年間は歯科診療全般にわたるスキルアップを図り，その後，歯周治療を踏まえた補綴処置の考え方・実際を学ぶプログラムが組まれ，さらに，エンドやインプラントに関しても予知性の高い治療を実践する指導が行われている．

↑中村公雄先生

最後に中村先生が，「歯周治療で支台歯周囲ならびに欠損部顎堤の骨造成が行われ，インプラントで欠損部の固定性修復が可能になることによって補綴治療のなかで欠損部修復の方向が随分変わってきてはいるが，補綴術式の基本が変わるものではない．補綴治療は1本のクラウンをいかに精密に作成し，歯周組織に調和させて装着するかというところからはじまる．」さらに，「補綴歯科学会において，一般臨床家の先生方が発表できる雰囲気（土壌の整備）と大学以外の認定医の増加を望みたい」とお話しされていたのが印象的であった．

（広報　北川）

次回学術大会のご案内

第111回日本補綴歯科学会学術大会
第2回　日・韓共同学術大会

開催日：平成16年5月21日（金），22日（土）
会　場：文京シビックホール
大会長：大山喬史（東京医科歯科大学大学院）

☞ニュース　第111回学術大会課題口演課題

1．チェアサイドにおける咀嚼・嚥下機能評価法の開発，2．チェアサイドにおける発語機能評価法の開発，3．審美，4．新材料，5．バイオテクノロジー，6．インプラント，7．咬合と全身

（学術委員会）

今後の学術大会のご案内

第112回日本補綴歯科学会学術大会

開催日：平成16年10月15日（金），16日（土）
会　場：横須賀芸術劇場
大会長：豊田　實（神奈川歯科大学）

第113回日本補綴歯科学会学術大会

開催日：平成17年春
大会長：野首孝祠（大阪大学大学院）

第 114 回日本補綴歯科学会学術大会

開催日：平成 17 年秋
大会長：河野正司（新潟大学大学院）

支部会のご案内

東関東支部

開催日：平成 16 年 2 月 8 日（日）
会　場：彩の国すこやかプラザ
大会長：蓮見健壽（埼玉県歯科医師会会長）
協　力：明海大学歯学部歯科補綴学講座

東京支部

開催日：平成 16 年 2 月 21 日（土）
会　場：日本大学会館
大会長：三浦宏之（東京医科歯科大学大学院）

西関東支部

開催日：平成 16 年 1 月 11 日（日）
会　場：パシフィコ横浜会議センター
大会長：藤田忠寛（神奈川歯科大学高次口腔科学研究所）

関西支部

開催日：平成 16 年 2 月 29 日（日）
会　場：兵庫県歯科医師会館
大会長：江藤隆徳（大阪歯科大学）

国内関連学会のご案内

第 22 回日本接着歯学会学術大会

日　時：平成 16 年 1 月 24 日（土），25 日（日）
会　場：鹿児島市民文化ホール
大会長：田中卓男〔鹿児島大学大学院医歯学総合研究科咬合機能補綴学講座（旧：歯科補綴学第 1 講座）〕

連絡先：事務局長　鬼塚　雅
準備委員長：梶原浩忠
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科咬合機能補綴学講座
〒 890-8544　鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1
TEL：099-275-6212　FAX：099-275-6218
http：//www.adhesive-dent.com/

第 32 回日本顎口腔機能学会学術大会

日　時：平成 16 年 4 月 17 日（土）
会　場：九州大学大学院歯学研究院講義室
大会長：寺田善博（九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座咀嚼機能制御学分野）

特別講演：
「口腔内のセネストパチー―口の中の奇妙な感覚―」（仮題）
黒木俊秀（九州大学大学院医学研究院精神病態医学）

連絡先：
日本顎口腔機能学会第 32 回学術大会準備委員会
九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座咀嚼機能制御学分野
〒 812-8582　福岡市東区馬出 3-1-1
TEL：092-642-6371　FAX：092-642-6374
E-mail kimie@dent.kyushu-u.ac.jp

日本補綴歯科学会認定医関係

新規認定医

（認定期間：2003 年 4 月 21 日～2008 年 4 月 20 日）

東北・北海道支部
上田康夫（北大），黒澤正雄（岩医大），照井崇之（岩医大），金村清孝（岩医大），工藤　努（岩医大），柳　智哉（滝川歯科医院）

東京支部
野村貴生（東歯大），羽毛田　匡（東医歯大），片桐慎吾（日歯大），金　修澤（昭和大），山縣徹哉（昭和大），堀江伸行（慶應大医），清水信行（日大），谷口洋平（日大），下平　修（昭和大），庄司　力（日大），村松　透（日大），柴田稚子（昭和大）

西関東支部
藤原　基（神歯大）

東海支部
小澤武史（松歯大），佐久間重光（愛院大）

関西支部
吉田和也（京大院）

中国・四国支部
白井　肇（岡大院），森　慎吾（岡大院），崎谷公子（岡大院），西村正宏（広大）

（認定期間：2003 年 9 月 8 日～2008 年 9 月 7 日）
関越支部
田中みか子（新大），荒井良明（新大）
東関東支部
小林　平（日大松戸），渡辺　官（日大松戸）
西関東支部
鈴木みどり（鶴見大）
東海支部
中村健太郎（中村歯科醫院）
九州支部
徳丸哲也（徳丸歯科医院），松山美和（九大院）

新規指導医

（認定期間：2003 年 4 月 21 日～2008 年 4 月 20 日）
東北・北海道支部
佐久間崇之（（医）佐久間歯科医院），遠藤義樹（岩医大），松田　葉（松田歯科医院）
東関東支部
鈴木伸宏（鈴木歯科医院）
東京支部
堀田宏巳（東歯大水道橋病院），福永秀樹（昭和大歯科病院），飯島裕之（飯島歯科医院）
西関東支部
大谷賢二（日大歯学部附属歯科病院），沖倉喜彰（おきくら歯科医院），小林和弘（新代田歯科医院）
東海支部
安藤雅康（中央歯科クリニック），橋本和佳（愛院大）
関西支部
奥田眞夫（奥田歯科クリニック）
中国・四国支部
竹内久裕（徳大），細木真紀（徳大）

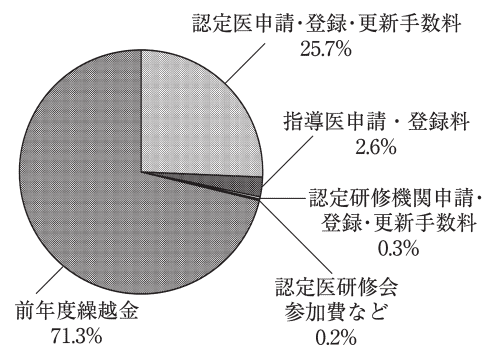
（認定期間：2003 年 9 月 8 日～2008 年 9 月 7 日）
東北・北海道支部
沖野憲司（沖野歯科），三浦美文（北大），菅野博康（すがの歯科医院），田中義博（宝来中央歯科）
東関東支部
桑原克久（日大松戸）
東京支部
秋山仁志（日歯大），五味治徳（日歯大），松田哲治（日歯大）
西関東支部
木本克彦（神歯大），小泉政幸（小泉歯科）
東海支部
藤原道夫（藤原歯科室），黒岩昭弘（松歯大院），水野辰哉（愛院大），竹内一夫（愛院大），八木庸行（八木歯科）
関西支部
吉田和也（京大院）
中国・四国支部
津賀一弘（広大院）

新規認定研修機関（甲）

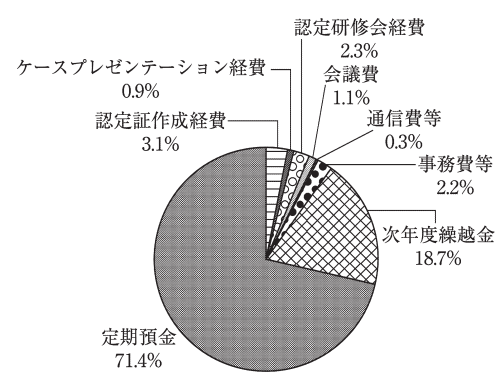
北海道大学歯学部附属病院高次口腔医療センター
明倫短期大学附属歯科診療所
大阪歯科大学附属病院口腔インプラント科
東京歯科大学スポーツ歯学研究室

認定医関連の歳入・歳出

平成 14 年度の歳入・歳出の統計は 70,704,091 円であった．



平成 14 年度認定医関連歳入



平成 14 年度認定医関連歳出

NC VERACIA
SHOFU
ナノ テクノロジーと
機能的形態が融合した 新人工歯　硬質レジン歯
NC Veracia
医療用具承認番号 21100BZZ00751
NC ベラシア アンテリア
硬質レジン歯（前歯用）1組…¥780　色　調：A1、A2、A3、A3.5、B2　形　態：上顎5形態、下顎3形態
医療用具承認番号 21200BZZ00272
NC ベラシア ポステリア
硬質レジン歯（臼歯用）1組…¥1,040　色　調：A2、A3、A3.5、B2　形　態：上下顎各2種
価格は2002年11月現在の標準医院価格(消費税抜き)です。
SHOFU　世界の歯科医療に貢献する
株式会社 松風
本社●〒605-0983京都市東山区福稲上高松町11・TEL(075)561-1112(代)

Letter for Members No. 12 2003

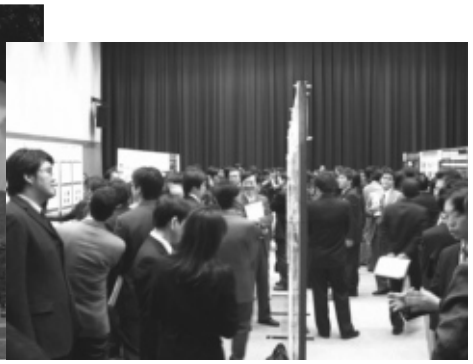
Japan Prosthodontic Society

日本補綴歯科学会
Japan Prosthodontic Society
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpds/
発行人　大山　喬史　　編集　広報委員会
事務局　〒170-0003　東京都豊島区駒込1-43-9　（財）口腔保健協会
Tel 03-3947-8891　　Fax 03-3947-8341

平成15年12月10日発行

コンテンツ

日本補綴歯科学会の法人化に向けて ……1
補綴治療における症型分類の導入 ……1,2
診療報酬改正に対する学会のかかわり ……2
学術大会の年1回開催化へ向けて ……3,4
国際渉外からのお知らせ ……4
日本歯学系学会連絡協議会設立
　Union Council of Japan Dental Sciences ……4,5
優秀論文賞対象枠の拡大へ ……5,6
日本補綴歯科学会の財政 ……6
第110回学術大会報告 ……6〜10
国内関連学会報告……10〜12
会員の声… ……12,13
日本補綴歯科学会認定研修機関（乙）
　取材報告 ……13
次回学術大会のご案内 ……13
今後の学術大会のご案内 ……13,14
支部会のご案内 ……14
国内関連学会のご案内 ……14
日本補綴歯科学会認定医関係 ……14,15



学会および広報委員会へのご意見ご要望をお寄せください

日本補綴歯科学会広報委員会
委員長　冲本公繪　副委員長　北川　昇
委　員　貞森紳丞，濵野　徹，松山美和
幹　事　諸井亮司
TEL：092-642-6371，FAX：092-642-6374
E-mail：kohojps@dent.kyushu-u.ac.jp
〒812-8582　福岡市東区馬出3-1-1
九州大学大学院歯学研究院 口腔機能修復学講座
咀嚼機能制御学分野